

統計

◎英國鐵鋼生產額

英國鐵鋼聯合會調査に係る本年八月中の英國鐵類生產額は左の通りなり。(單位千噸)

本年	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	昨年	八月
鐵	六三二	六一三	六六九	六一八	六五一	六〇八	六一二	五八九	六〇〇	六〇〇
鋼塊	六九〇	七六八	八二五	七一	八一〇	六五二	六九三	五二八	五八三	五八三

◎米國銑鐵生產額

米國アイアン・エーヂ誌の發表に依れば本年八月中の米國銑鐵生產高は百八十九萬一千百噸にして、尙昨年八月以降の生産額左の如し。(單位千噸)

昨年	八月	九月	十月	十一月	十二月	本年	一月	二月
銑鐵	三、四四九	三、一二五	三、一四九	二、八九四	二、九二〇	三、〇一八	三、〇一八	三、〇七四

三月	四月	五月	六月	七月	八月
三、四六六	三、二二三	二、六一五	二、〇二六	一、七八四	一、八九一

◎印度石炭產出狀況

(七月廿八日在カルカッタ帝國總領事岩手嘉雄)

一九二三年竝に一九二二年の英領印度及印度諸蕃邦の炭坑より石炭產出高左の如し。(單位噸)

英領印度	一九二二年	一九二三年
緬甸	一七二	二、一六六
アッサム	三四八、一〇三	三二六、一四九
ビハル及オリッサ	一二、七一	一三、二二二、二五〇
ベンゴール	四、三二八、九八六	四、六二一、五七八
パンヂャブ	六七、一八〇	六三、五〇一
バルチスタ	六〇、一三五	四二、五六二
中州	六七五、九一六	五四八、〇七四
合計	一八、一九一、八二〇	一八、八一六、二八〇
印度蕃邦	六四二、八八〇	六五八、四二九
ハイデラバード	一五、〇五五	七、一一九
ラガプタナ	一六一、二三一	一七五、九五〇
中央印度	八一九、一六六	八四一、四九八
合計	一九、〇一〇、九八六	一九、六五七、七七八
總計	一九二二年	一九二三年
尙外國炭と印度炭との供給高左の如し。(單位噸)	一九二二年	一九二三年
外國の輸入	一、七一二、四六七	六二九、一六九

外國炭の再輸出	七二、九四四	四六、〇三一
差引外國炭の輸入高	一、六三九、五二三	五八三、一三八
印度石炭産出高	一九、〇一〇、九八六	一九、六五七、七七八
印度炭の外國輸出	七七、一一八	一三六、五八五
差引印度炭の殘額	一八、九三三、八六八	一九、五二一、一九三
印度石炭の實際供給高	二〇、五七三、三九一	二〇、一〇四、三三一

一九二三年印度諸港のベンゴール炭の噸當價格左の如し。

一九二三年	カルカッタ港 (ジェリア二等炭の船積値段)	孟買港 (デシヤルガール炭の坑口渡値段)	カラチ港 (ベンゴール一等炭の船積値段)
一月	六・〇八	一三・〇〇	三五
二月	六・〇八	一二・〇八	三五
三月	六・〇八	一二・〇八	三五
四月	六・〇八	一二・〇〇	三五
五月	六・〇四	一二・〇八	三五
六月	六・〇四	一二・〇八	三五
七月	六・〇八	一二・〇〇	三五
八月	六・〇〇	一一・一二	三五
九月	六・〇〇	一一・一二	三五
十月	六・〇〇	一二・〇八	三五
十一月	五・一二	一二・一二	三五
十二月	五・〇八	一二・〇〇	三五
平均	六・〇三	一二・〇五	三五

### ◎世界石油産出狀況

六月二十六日發刊ウィルトシャフト・ウント・スタチスチック誌上に一九二三年度世界石油産額に關し詳細掲載せり左の如し。

石油産額は不斷に増加しつゝあり而して一九二三年に於ては石油生産品に對する需要は全生産額を消化し得るや否や危

惧の念を生ぜしむるに至れり右の如き事情にも拘らず斯る生産過剩は僅に一時的の現象たる可きを以て石油産出區域に對する經濟戰及一部政治的戰争は依然として繼續せり。

石油産出の將來の隆替は主として一方シリヤ、メソポタミヤ波斯方面と他方南方に於ける産出の發表如何に懸れり、從て是等方面は著しき係争區域となれり亞米利加之シンクレイア・トラストと英國と相並びて地歩を占め居れる北部波斯の狀況は未だ不明なるが露國生産の復活(戰前生産額の五割五分)と共に各利害關係國が其獲物を自己の手中に占めんとする試みは更に増大せり。

### 世界石油産額國別 (單位千バレル)

産出地別	一九二三年 數量 百分率	一九二二年 數量 百分率	一九二三年 數量 百分率
北米合衆國	三四六、四四六	三四六、四四六	五七、五三一
墨西哥	二五、六九六	六、六七	一八、二二六
露國(米、亞、西)	一、六三三	三、九六六	三、九六六
露國(米、亞、西)	一、八七〇	〇、〇	三、九六六
波斯	二、一七三	二、九〇九	二、五七
蘭領東印度	二、一七三	二、九〇九	二、五七
羅馬尼	一、三五五	九、八四三	一、一五
英領印度	七、九三〇	七、七〇〇	七、七五五
秘露	二、〇九一	五、三三四	六、三七五
波蘭(甲)	—	五、三三七	五、〇〇〇
ヴェネツエラ(乙)(110)	—	二、三〇一	三、八〇〇
サラワク	一、四一	二、八四九	三、八八七
亞爾然丁	一、三	三、〇一八	三、一五〇
トリニダッド	五、〇四	二、四四	三、〇八七
日本及臺灣	一、九四三	二、〇四二	一、六九五
埃及	九六	一、一八	一、〇三七
佛國	—	四、六	五、〇

哥倫比亞	—	三三	0.04	四六	0.04
獨逸(*)	八七	三九	0.04 (丙)	三三	0.04
加奈陀	三六	0.06	一七	一五	0.01
致須國(甲)	—	—	1.01	100	0.01
伊太利	四七	0.01	三	三	0.00
其他	三〇	0.01	110	0.01	三〇
合計	三三三	100.00	八四〇	100.00	100.00

(註) \*印 戦前の領域に依る、甲印 澳洪國一九二二年七百八十一萬八千  
 乙印 一九一七年に依る、丙印 一九二二年は官廳側暫定統計に據れば五萬八百噸(約三十八萬バレル)

世界の石油産額は亞米利加石油研究所及合衆國地質調査所の計算に據れば一九二三年は其前年に比し一割八分増加して十億千萬バレル(註、亞米利加に於て一バレルは亞米利加式の四十二ガロン英國式の三十五ガロンにして一・五九ヘクトリツトルに相當す)に達し一九一三年に比すれば十六割二分の増加なり米國の生産額は前年度の世界産額の六割七分より七割三分に増加し之に反し墨西哥の産額は二割一分より一割五分に減少せり、歐洲及亞細亞の産額増加は著しからず約六分即ち二百萬バレルの増加に過ぎず南米の産額は總計四百萬バレルの増加にして數字上に於ては大ならざるも尙少からず發達の餘地あることを示せり。

石油採取と關聯して鑛油加工設備即ち精煉所も亦大なる發達を遂げ一九二三年末に於ては精煉所の數約六百を數へ原油の加工能率日に三百萬バレルに達するに至れり。

米國石油採取量の増加は主として南カリフォルニア、テキサス方面石油産出區域の發展に基く是等は一九二三年下半年期に於て其頂點に達したるが十月以降は引續き漸減し一九二四年

三月に至り再び僅少の増加をなせり之に反して一九二三年の初には甚だ僅少なりし原油の輸入は再び幾分増加したる結果一九二三年及一九二四年々初の消費高は略々同額に達せり。

米國鑛油消費高(單位千バレル)

一九一三年一箇月平均	二一、八〇八	(丙)内國産	二〇、三二四
一九二二年同	四九、三七〇	内國産及輸入品	三八、九九三
一九二三年同	五九、二二八		五二、四〇四
一九二四年一月	六二、二六二		五五、三四四
同 二月	五九、二二八		五二、九九七
同 三月	六三、一九七		五五、二〇九
同 四月	六一、五四六		五四、三七四

一九二三年十二月以降消費額は幾分減退せり即ち其消費額は一九二三年に比するに一九二三年の平均消費額は二十四割七分にして同年十二月は二十九割なるも一九二四年一月は二十八割六分二月は二十七割一分となれり但し三月及四月は再び二十八割九分となれり。

米國に於ける原油の在庫數量左の如し。

一九二二年一月一日現在	一億七千四十萬バレル
一九二三年一月一日同	二億六千四百六十萬同
一九二四年二月二十九日同	三億三千四百九十萬同
同 年三月三十一日同	三億三千八百五十萬同
同 年四月三十日同	三億四千九十九萬同

一九二三年三月石油價格は一バレルに付一弗八十五仙となりて最高價格に達し戦前の價格に比すれば略々其倍額に上れり一九二三年十二月には價格は戦前の十割九分に過ぎざりしが一九二四年四月には生産減退の影響を受け再び十八割七分(一バレルに付一弗七十五仙)に騰貴せり。

米國に於ける重要精製品生産額 (單位百萬ガロン)

主要精製品	一九〇四年		一九一四年		一九一九年		一九二三年	
	數量	百分率	數量	百分率	數量	百分率	數量	百分率
ガソリン	2,005	2.5	1,400.0	1.6	4,108.6	3.2	7,559.9	3.7
燈火油	1,356.8	1.7	1,933.3	2.3	2,005.5	1.5	2,346.9	1.1
瓦斯油	30.5	0.0	3,704.1	4.6	7,767.9	5.9	11,074.2	5.3
燃料油	3,499	4.4	5,768	7.1	6,816	5.2	10,274	4.9
機械油	2,337	3.0	7,642.1	9.6	15,100.6	11.5	31,076.4	15.0
合計	80,000	100.0	80,000	100.0	80,000	100.0	80,000	100.0

一九二三年十二月米國に於ては二百四十六の精煉所營業をなし居り是等は日々原油二百十六萬バレルの精煉をなせり之を一九一四年に比するに當時米國製煉所の數は百七十六に過ぎず又其精煉量は全年を通じ僅に一億九千三百三十萬バレルとす然れども鑛油精煉業の勃興に伴ひ各種生産品が同程度に發達したるものにあらず燈油は一九〇四年には精煉所主要精製品の五割八分を占め居たるが一九一四年には二割六分に一九一九年には一割五分に一九二三年には一割に減少せり之に反して瓦斯及燃料油は石油燃焼及石油モーターの發達と關聯して増加せり精煉所に於ける主要生産品價格百分率左の如し。

ガソリン	燈油	瓦斯及燃料油	機械油
一九一四年 三四・〇	二七・〇	二二・四	一五・六
一九一九年 五〇・五	一五・五	二一・〇	一三・〇

ガソリン精製は第一位を占め一九二三年には前年に比し更に二割二分の増加を示したるも燈油の精製は漸く二分方増加せるに過ぎず又ベンゼンは石油精煉所に於て採取するガソリンより取ることを得るも天然瓦斯よりも亦之を獲得し得然れども前者に比すれば其量僅少に過ぎず。

(註) 天然瓦斯より採取せるベンゼン量一九一一年四十一萬ガロン、一九一四年四千二百七十萬ガロン、一九一九年三億五千五百五十萬ガロン、一九二二年

四億四千九百九十萬ガロン。

米國石油精煉業の勃興は自動車交通の増加に依るベンゼン消費の増加に起因するものにして一九二三年自動車の月平均増加數は乗客用三〇三、〇六四臺、貨物用三一、三四二臺にして一九二四年三月には其増加數三八二、四五九臺に上り其内三四八、二九六臺は乗客用とす、一九二三年末米國の自動車總數は千五百三十萬臺とし各一臺の平均一箇年ベンゼン消費量を四百五十ガロンとすれば當時の自動車交通に於て六十九億ガロンのベンゼンを使用するものなり。

墨西哥に於ては政治的騷動が油田に多量の浸水ありて損失を蒙りたると南方油田に於ける輕油地域の汲み盡されたること等に依り最近二年以來の現象たる石油產出減少は本年度に於ても亦之を見たり一九二三年には產出額一億四千九百五十萬バレルに達し前年に比すれば一割八分一九二一年に比すれば二割三分の減少なり但し一九一三年の產出額に比すれば尙五十八割二分に上り南方油田の成績不良はパヌコ地域の重油採取の増加に依り一部分之を補ふを得るものにして右重油の採取は墨西哥石油總產額の五割五分を占むるに至り墨西哥は自國にて原油を精煉すること大に發達し精煉所の日々の能力は二十五萬バレルと見積られ居り。

歐洲の三大石油生産國の内羅馬尼亞は前年に比し一割増加し露國は一割六分増加せり之に反し波蘭は四分以上減少せり。

(註) 然れども波蘭の原油純生産額は最新の報告に據れば六十三萬二千噸を數へ前年は五十八萬六千噸を計上せりと云ふ) 戦前の状態に比すれば上記三國は夫々二割、三割九分、三割六分減少し殊に波蘭は幾分油田の源泉汲み盡されたる傾

ありてガリシヤに於ては非常に深く掘下げ且堅坑となさざる可らざるに至れり。

羅馬尼には六十餘の精煉所あるも多くは小規模なり是等工場の一九二二年精煉量はベンチン二十八萬五千噸、燈油二十一萬四千噸、鑛油十一萬三千噸、固體生産物(バラフィン、アスファルト等)五十七萬三千噸とす、露國に於ける四十五の精煉所の能率は日々十五萬バレル即ち約百二十萬布度と見積らる、波蘭に於て活動し居る精煉所は約三十なりしが其一九二三年に於ける精煉所は原油六十五萬四千噸にして前年同期に比し一割の減少とす。

最近數年間に英國に於ては少數なれども甚だ能力大なる精煉所建設せられたり英國の石油類輸入は一九二一年十億六千萬ガロン、一九二二年九億九千六百萬、一九二三年九億九千二百萬、一九二四年上四半期季に二億四千二百萬ガロンに達し毎年略々同額に上れり之に反し原油の輸入は同年間に約三倍以上となり一九二一年一億百四十萬ガロン、一九二二年二億千七百十萬ガロン、一九二三年三億三千四百六十萬ガロン、一九二四年上四半期に八千六百萬ガロンを計上し居れり英國に於て精煉せらるる原油は第一にアングロ・ペルシヤ石油會社所屬の石油産出地域より輸入せらるるものにして同地域は一九一八年乃至一九一九年に百十萬噸一九二二年乃至二三年に三百萬噸を産出せり、而も二十三年乃至二十四年に於ては尙各七十五萬噸位の産出増加の見込なり。

獨逸の石油界は本年初ハンノーバー地域に於て新に掘鑿に效を奏せしを以て獨逸の状態としては相當輕視すべからざる衝動となれり既に一九二三年に於て獨逸石油産額は官廳側の暫

定計算に基けば一九二二年に比し二割一分の増加をなせり。和蘭にては新に一割のベンチン含有量ある鑛油の湧出を見、塊地利にても亦新油田の開発を見んとす但し是等の結果は單に當該國に對する地方的價值を有するに過ぎず。

### ◎蘭領印度石油産出狀況

(七月十三日在バタヴィア帝國總領事井田守三)

當領農商務省の發表せる最近統計に依れば蘭領各島の石油産額狀況左の如し。

一九二〇—二二年原油産額 (單位噸)

島名	一九二〇年	一九二一年	一九二二年
スマトラ島	一九二〇年	一九二一年	一九二二年
アヘーロン	一三八、〇三五	一八六、〇三九	一一八、四五六
スマトラ東岸	五六、四〇四	六〇、二二一	八九、三八五
ハレムバンカ	三三九、〇四〇	三三九、三八四	三五三、二一四
計	五三三、四七九	五八五、六四四	五六〇、五五五
瓜哇島			
サマラン	三三、八一八	五、二六六	三一九
レムバンカ	二五九、三七一	二二二、五三六	一九四、五三〇
スラバヤ	五九、二六一	六二、〇一〇	六〇、三一二
マダユラ	二五	三	五
計	三五二、四七五	二七九、八二四	二五五、一六六
ボルネオ島			
クラカン	七二、〇一〇	六九五、三一三	六六三、二九九
キユタイ	七四四、二一八	七四一、四六六	八五七、六二八
ユルユ・カラ			
グ・ミユミユス			
計	一、四五五、二二八	一、四三六、七七九	一、五三一、〇八一
ゼラム島	二一、一三八	四九、二六一	四五、一九六
總計	二、三六二、三一八	二、三五一、五〇八	二、三八二、三九八

尙一九二三年中蘭領印度石油總產額は調査中なるがボルネオ島テラカン地方の同年産額は八六一、五〇一噸にして就中ペルラク會社は九九、四八〇噸を又東ボルネオ會社は二六四、七八〇噸を産出せり。

### ◎本邦重要鑛物産出狀況

(大正十三年七月農商務省鑛山局調査)

#### 本年七月中重要鑛物産額

(△は減少を示す)

鑛種	本年七月分	本年一月以降累計	前年同期累計 増減と比較	
金 (匁)	一五一、一七七	一、一五九、〇四八	△三七、六九七	
銀 (匁)	二、二〇六、二〇四	一六、二九六、九二九	△九二六、四五八	
銅 (斤)	八、二〇〇、四一〇	五五、九八六、四二六	五四、九四四	
鐵 (佛噸)	五、一九二	三七、六四〇	△五四六	
石炭(佛噸)	二、三〇八、二九五	一六、一四三、〇六一	五六三、三四六	
石油(石)	一三二、〇八〇	八七一、〇七三	四、四四七	
硫黃(佛噸)	四、一七二	二四、四七六	五、二九七	
石	炭 (單位佛噸)			
鑛山名	所在地	七月分	一月以降の累計	前年同期累計 と比較増減
三井池田	福岡	一三五、七一一	一、〇六六、〇三九	△四六、七八〇
大之浦	福岡	九八、八〇三	七六九、七二二	五九、二三〇
夕張	北海道	八八、六二四	六一八、七二六	二九、八七九
三井田川	福岡	七二、四五五	五三四、八六四	△六六、八二〇
二瀬	福岡	七七、〇九七	五六〇、六九〇	三二、六五二
内郷	福島	六三、八七〇	四四九、四五〇	三〇、二八五
三菱美唄	北海道	五八、二〇〇	三五一、七〇〇	△八、六〇〇
飯塚	福岡	三七、四一三	三一、六七八	△一八、三六三
鯨田	福岡	四六、〇六四	三二八、八七〇	二八、八七四
三井山野	福岡	四二、一四一	二九一、八八一	一、一七一

新夕張	新入	新治	明地	赤海	新原	豊岡	杵島	崎戸	新山	沖山	忠隈	松島	木屋	三井	好間	相知	空知	八山	大峰	高島	大津	岩屋	方城	目尾	大峰	第二	千代	高尾	芳雄	佐賀	芳谷	上山
北海道	福岡	福岡	福岡	福岡	福岡	福岡	佐賀	長崎	山口	山口	福岡	長崎	福岡	北海道	福岡	福岡	北海道	福岡	福岡	長崎	福岡	佐賀	福岡	福岡	福岡	山口	茨城	福岡	福岡	佐賀	佐賀	福岡
四四、〇六〇	四七、五三三	二七、〇八六	二二、七〇一	四一、六〇一	四四、三七九	三四、二四五	三七、二五〇	三九、八三四	三五、四九五	三七、八八〇	三三、一二〇	二八、四一九	三五、九一一	二七、九九一	三〇、三六五	三〇、六八〇	二一、六三二	二八、五〇五	二二、四〇七	二二、三九〇	二二、九九四	二六、七一	二四、三二八	二五、六五七	一八、七九一	一七、三〇七	一〇、九三八	二〇、〇六一	二四、一三二	七、一六〇	二〇、二九九	
二八一、〇五三	三一、〇二七	一六九、一八七	一四七、八一二	二六三、二〇八	二九三、一六六	二四三、六三六	二九一、三三四	二六〇、六四〇	二四〇、三三八	二五二、六四九	一八四、八一〇	二一七、八二三	一九七、〇九八	二〇九、八八二	一七三、一八九	一七四、五二六	一九九、四〇五	一五二、一〇八	一五八、四八八	一六六、五六八	一八二、二三九	一九四、九八七	一七二、八三七	一一七、一八九	一二八、六二一	九七、五六四	一三八、三三七	一五四、四四四	四六、七四六	一三三、八三六		
一一、五一三	五〇、三一七	六〇、六七八	一三、八四六	三二、三八六	△一六、五九一	五二、四一六	二一、七三七	九、一六四	一七、四二五	三六、三三一	△三二、二二七	三五、六五四	△一八、四一八	一七、六六二	△一二、三六七	七、五五七	二四、〇三三	△三四、四三五	△一九、六四八	八、九四九	三九、四九〇	四四、八四八	四七、九八九	△二三、五三三	△二、七一八	△四二、五四二	四、八〇二	三七、七五八	△九〇、八〇六	九、七五三		

産地	数量	数量	数量
姪濱	一五、〇〇六	一〇六、一九一	△一七、四七二
幌内	一七、三三七	一一六、一九九	△三、八八六
西沖ノ山	一三、五一五	八八、八六六	△三〇、五〇五
峰地	一四、五二九	一一一、六一六	△一、五〇六
東見	一八、二五五	一二三、七九七	一七、〇六〇
茂尻	一七、〇二九	一一六、〇七七	一六、四一九
茨城無煙	二三、九六〇	一三三、八六四	二〇、一〇七
平山	一五、〇三七	一一一、三八三	一、七六七
綱分	一七、二五二	一二二、〇三七	一九、九二〇
金田	一六、八六一	一一一、〇一六	三、一七七
眞谷	一七、八二一	一一二、六八七	一三、五四四
奔別	一五、二八〇	九五、六八六	四、一七九
高江	一〇、八九五	九六、五四六	△四、一八二
福岡二坑	一〇、〇二五	六二、五〇二	△三三、三一五
小野田	一五、八〇二	一〇三、二八二	四、八八九
御徳	一三、五〇九	八九、六四七	△三、七八〇
三菱芦別	一六、六七四	九二、六六二	六、五九二
起行小松	一五、八三六	一一六、一九二	三〇、〇七七
稻築	一〇、四一六	八八、五九九	一一、八一七
糟谷	一二、六一八	二一、六五〇	二、〇七一
漆生	一一、七三三	八六、五一三	一一、三六四
高田	一一、一八二	七六、九七二	四、三四〇
小野田第二	五、九七〇	五四、〇三六	△二四、三七六
登川	一〇、八八六	七七、六一四	七、八六一
下山田	一二、二六〇	九八、七九五	三五、一九三
幾春別	九、五七六	七〇、一三八	△一、五〇五
大日本	一二、七九四	八〇、八九九	八、三〇六
上歌志内	八、六〇二	四八、三〇二	△一六、三六九
春探	九、五五〇	六〇、〇二一	△一、七八四
湯本	八、九〇二	六一、五八二	△一、五六一
雄別	一一、八一八	六三、二〇二	二、八七九

統計

計

石油 (單位石)

油田別	所在地	七月分	一月以降の累計	前年同期累計と比較増減
豊川	秋田	二二、四四六	一三六、五五二	△一八、七八一
黒川	秋田	一五、一八九	一二四、二〇六	三、一八八
道川	秋田	一五、八四四	九五、八七九	三九、一七八
由利	秋田	九、六二二	六三、七九〇	三、三二〇
小倉豊川	秋田	一、五一八	一〇、六一二	△二、二八八
旭由利道川	秋田	二七八	二、二〇九	△七、九七一
新津	新潟	三九、五九二	二五四、五三八	五〇、六三九
西山	新潟	一三、八四六	九四、一五一	△八、四三一
東山	新潟	八、二一四	五四、九五九	△二、五九七
七日市	新潟	一、八五一	一一、七七六	三、七三八
大西	新潟	一、七三二	八、七八四	二九一

◎米國鐵鋼市況 (九月十八日紐約西商務官來電)

米國經濟界の趨勢は八月以來上向の徑路を取りつつあるが、大統領選舉を控え多少の波瀾はあるべきも大勢に於て暫くは漸次好況に向ふものと觀測せらる、唯米國工業界は稍々恢復の徴候を見せつつあれども内外の需要兎角渉々しからざるに、生産費特に勞銀割高の爲利潤漸減の苦境にある傾向顯著なり。

當國に於ても支那時局の影響に就て多大の注意拂はれつつあるが、米國の對支貿易には左したる影響なかるべしと觀察しつつあり。

鐵鋼は今月に入り輸出不振、國內需要弗々値段睨り保合ひ。銅東洋方面輸出少量弱含み。海運界穀類輸送良好に活氣つく。